

心の優雅さがなければ —モードの帝王 イヴ・サンローラン—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

第2次世界大戦後のパリをファッションの都として復興させたクリスチャン・ディオールが1957年に急逝する。ディオール社の前途は弱冠21歳の青年に託された。ディオールの遺志を継ぐチーフ・デザイナーに抜擢されたイヴ・サンローラン（1936-2008）は次々と魅惑的なドレスを発表し、パリの救世主として華々しくデビューした。

しかし拍手と喝采の日々は長つづきしなかった。アルジェリア独立戦争でフランス軍に徴兵され、極度の神経衰弱に陥ってしまう。精神病院に収容され、電気ショック療法を含む治療を受けているうちにディオール社は別のデザイナーと契約し、事実上解雇される。

栄光の頂点から転落した敗残者に世間の風は冷たかった。だれもが再起不能と思っていた。だがほんとうのサンローラン伝説は失意のどん底から幕を開ける。

いじめで傷ついたヒーロー

サンローランはフランスの植民地アルジェリアのオランで保険会社に勤務する中流家庭に生まれた。幼くしてパリ17区に引っ越し、流行に敏感な母がドレスやアクセサリーを身につける姿を見るのが大好きな子供だった。17歳になって留学生の三宅一生など多くの有名デザイナーを輩出したパリ・クチュール組合学校に入学する。

在学中、新人の登龍門のデザイン・コンクール

にカクテル・ドレスを提出し、最優秀賞を受賞。縫製はのちにジバンシィを立ち上げるユベール・ド・ジバンシィが務めた。毛皮部門の最優秀賞はシャネルを再興させたデザイナーとして著名なカール・ラガーフェルドが獲得している。

世界的なファッション雑誌ヴォーグの編集者はサンローランの作品に驚嘆し、友人のクリスチャン・ディオールに紹介する。ディオールもすぐに非凡な才能を見抜き、まだ19歳の未完の利器を将来の後継者として迎え入れた。

ところがディオールはわずか3年後に心臓発作で急死する。ディオール社は偉大なディオールの愛弟子であるサンローランを押し立てて創業以来の最大の危機を乗り切ろうとした。

チーフ・デザイナーに起用されたサンローランは期待に応じてトラペーズ・ラインという独創的なデザインのドレスを秋のパリ・コレクションで発表し、従来の顧客はもとより若者たちや評論家から絶賛された。絶大な人気はファッション界にとどまらず新世代のヒーローとして脚光を浴びる。その一方でアルジェリアでは独立運動が激化



カトリーヌ・ドヌーヴと
イヴ・サンローラン

し、内戦状態になっていた。サンローランも否応なく徴兵される。ディオール亡きあとオーナーの座に就いた右翼のマルセル・ブサックが同性愛者のサンローランを忌み嫌い、徴兵を画策したとも伝えられている。嫉妬、偏見、差別が渦巻く軍隊内の陰惨ないじめによって繊細なサンローランの心身は崩壊寸前に追い込まれた。

史上初の黒人モデルの起用

精神病院に送られたサンローランはディオール社に見放され、世間からも忘れられていった。それでも恋人のピエール・ベルジェに支えられ、病状は徐々に回復していく。ふたりは1961年、新たな独立ブランドとしてイヴ・サンローランを創設し、起死回生を期して活動を再開する。資金はアメリカの実業家などが援助した。

かつての好意的な顧客などのオートクチュール（仕立服）を請け負って実績を積み重ねていったサンローランは1966年、新たにプレタポルテ（既製服）のブティックを開設する。フランスを代表する女優カトリーヌ・ドヌーヴの新作主演映画『昼顔』の衣装を担当することでサンローランの人気は一気に再燃した。これを機にドヌーヴはサンローランの終生の友人になる。

勢いのついたサンローランは続々と革新的な作品を連発し、ファッション界の話題を独占していく。現代絵画からインスピレーションを受けたモンドリアン・ルック、スカートに代わる普段着として提案したパンタロン・スタイル、民族衣装のテイストを醸し出すアフリカン・コレクション、上半身が大胆に透けて見えるシースルー、野性味のあるサファリ・ルックなど躍動する女性の美しさを追究した一連の作風が熱烈に支持され、モードの帝王と呼ばれるようになる。

1970年代から80年代にかけてファッション界をリードしたサンローランは有色人種をはじめモデルに起用し、人種差別による悪習を打ち破った。黒人スーパー・モデルのナオミ・キャンベルが肌の色でヴォーグの表紙になれないと伝えるとサンローランは自社ブランドの広告をすべて引き上げると編集長に迫り、彼女は初の黒人モデルとしてパリ版ヴォーグの表紙を飾った。日本人では

川原亜矢子をパリ・コレクションなどに起用した。

ファッション界の頂点を極めたサンローランも軍隊で虐待された経験がトラウマとなり、酒とドラッグに溺れて物議を醸したことも少なくない。2002年のオートクチュール・ショーを最後に引退し、モロッコのマラケシュで晩年を過ごす。

エレガンスの象徴として

恋人のピエールと静かな暮らしを送っていたサンローランは癌を患い、71歳でこの世を去る。パリで開かれた告別式にはサルコジ大統領夫妻ら各界を代表する著名人が参列し、40年来の親友であるカトリーヌ・ドヌーヴがサンローランに捧げる詩を切々と朗読した。遺灰はよく散歩していたマラケシュのマジョレル庭園に撒かれた。

生前「すぐれたモデルはファッションを10年進化させる」と語っていたモードの帝王にスーパー・モデルも感謝を込めて哀悼の言葉を贈った。ナオミ・キャンベルは「私のキャリアにおいて、きわめて必要な人」と別れを惜しみ、ムーニアも「彼のおかげで肌の色に対する誇りを持つことができた」とファッション界の差別に風穴を開けたサンローランの偉業を讃えている。

女性の美しさを探求して膨大なコレクションを遺したサンローランにとってファッションとは女性のライフスタイルそのものを意味していた。「ファッションとは女性をより美しくするだけでなく安らぎと自信を与えるものだ」「女性にとってもっとも美しいメイクは情熱だ」「ドレスにとって大切なのはそれを着る女性だ」と精神面を重視し、美しさの真髄をエレガンスという言葉で表現した。「心の優雅さがなければエレガンスはない」と断言したサンローランにとって服装は内面の美しさを映し出す鏡のような存在にほかならない。だから「エレガンスとセレブ気どりを決して混同しないように」と釘をさしている。

エレガンスはサンローランが生涯にわたって敬愛したカトリーヌ・ドヌーヴに体现されていたといっているだろう。彼女は「着こなしは生き方だ」「ファッションは色褪せてもスタイルは永遠だ」というサンローランの服装哲学をいまなお象徴している。